七　三十年代の日高の商況

函館との取引

日高は地理的な条件からしても大市場を設けることは出来ないため、各地域に小市場があるに過ぎなかった。その主なるものは浦河・幌泉、次いで下々方（現静内）、門別、様似、姨布（現三石）、などで、さらにこれに次ぐのが佐瑠太（現富川）、捫別（現東静内）、厚別、小越等（現えりも岬）であった。その商業区域は管内にあっては、その地域の近傍数里の範囲に止まり、管外にあっては主として函館との取引であった。しかも商業にはお互に競争し合ったから、物価は一般に安値であるが、沙流郡のように、富裕な一商人が商権を左右する所にあっては割合に高値であった。

さて、明治三十年当時の重要市場における国外取引は次のようなものであった。

次の表によって明らかなように、国外の取引は主に函館で、直接府県と取引する呉服、太物類やその他の貨物は極めて僅少に過ぎなかった。

管内の商業は既に述べたように、農民、漁民共に概ね仕込の法によった。つまり商人が味噌、器具、縄、筵等、彼等の需要品の殆んどを売渡して、その代り農、漁の収獲物を引取っての勘定である。

明治三十年輸出表

	管外輸出			管内輸出		仕向地
	原価	重要品	仕向地	原価	重要品	
門別	、円			七三、八六八円	鰛粕、大豆、小豆、塩鮭	函館
下々方	、			一五二、九〇六	塩鮭、鰛粕、馬、大豆、小豆、昆布等	函館 其他
三石	、			七八、二三一	大豆、小豆、塩鮭、昆布、鰛粕、鰈粕、棒鱈等	函館
浦河	六、二三二	葉藍 マッチ軸木	神戸、越前 名古屋	一五三、八一九	大豆、小豆、塩鮭、昆布、鰛粕、鰈粕、魚油	函館
様似	、			六二、三八二	塩鮭、昆布、鰈粕、鰛粕、大豆、小豆	函館
幌泉	四、八一八	鰈粕、昆布 ぎんなん草	大阪	一七七、一六一	鰈粕、塩鮭、昆布、その他海藻類、塩鱒	函館

明治三十年輸入表

	管外輸入			管内輸入		積出地
	原価	重要品	積出地	原価	重要品	
門別	、円			四八、一五七円	米、呉服、太物、酒、筵、塩、醤油、石油等	函館
下々方	一八、一三四	呉服、太物 小間物 筵縄	東京 新潟	二九、四〇七	呉服、太物、酒、小間物、筵、縄	仝
三石	、			三八、九九二	米、呉服、太物、酒、塩、煙草、筵、菓子	仝
浦河	一五、〇〇〇	呉服 太物		二七五、五九四	米、呉服、太物、酒、味噌、筵、大麦、粉類、砂糖、陶器等	仝
様似	、			八六、五二五	呉服、太物、米、酒、塩、紙、綿、石油等	仝
幌泉	二、五三一	酒、畳、 味噌等	越後	一八二、四二三	米、酒、呉服、太物、網、魚網、筵、小間物	仝

従って現金売りより貸売りの方が常に多かった。今これら商人の中で代表的なものをあげると、沙流郡の飯田信三、静内郡の金子忠蔵浦河郡の赤心社商店、様似郡の矢本貞吉、幌泉郡の福原広吉等である。

然しこれら屈指の商人も、実を言うとその多くは決して資本が豊かでなく、常日頃函館の商人から債務を負っていたから、農漁の産物を輸送し販売してはこれを償還するのを例とした。金融は管内の西部においては、殆んどが陸産物の豊凶によって支配され、中部にあっては陸産物が主で、水産物がこれに次ぎ、東部では水産物の多少によって左右されたから、金融の緩急の時期は当然地方によって異なっていた。金利は普通一カ月二分~二分五厘であるが、稀れに五分に達するものもあった。

前記の如く日高は主として函館との取引であったから、函館港との経済関係を知るためさらに三十年以後における主なる事項について述べておく。

函館港出入汽船港別表（明治三十五年）

	入港		出港	
幌泉	三八隻	三、七三五屯	六四隻	六、五三二屯
浦河	一〇〇	一一、五五一	五七	六、〇六三
様似	一〇	一、八七七	一五	一、八一四
三石	四〇	五、一九八	六四	六、六五八

港別函館との貨物取引状況（明治三十六年）

	輸出	輸入
三石	一〇九、六六七円	九〇〇、六六七円
浦河	二〇〇、八一二	二〇〇、〇六九
幌泉	一八七、八五三	一八四、九七二

当時の日高仕出の重要商品を挙げると、鰮粕、雑魚粕、塩鮭、塩鱒、生魚類、塩鱈、塩魚類、乾魚類、海藻類、大豆、小豆、雑穀菜種、燐寸軸木、長切昆布、

汽船運賃概表　（函館～浦河間）

	明治四十二年		明治四十三年	
	最低	最高	最低	最高
米（百石）	二五円	三〇円	三〇円	三三円五〇
メ粕（百石）	五〇	六五	―	三二、
長切昆布（百石）	―	四五	―	四五、

函館よりの汽船運航実績（日高沿岸）

	隻数	総屯数	航海数	乗客数	貨物屯
明治四十二年	一五一	三〇、八六八	六五七	四、二六六	三七、一五六
明治四十三年	一〇四	一八、八八四	一、六九〇	四、二〇四	三七、一五六

函館の海産市場の沿革は遠く旧幕時代に遡るが、全漁場の海産物はすべて函館市場に集中すると同時に、函館市場はまた全漁場に対する唯一の投資者でもあった。日高沿岸漁場も函館の勢力圏にあったことは、三十年当時の輸出入表によって明らかであるが、両者の関係は明治四十四年頃に至っても依然として変ることなく、特に浦河管内は函館の重要な範囲で、永く往時の取引が維持されていった。

今、明治四十四年における日高管内の鮭鱒類の函館との商取引を示すと次のとおりである。

鮭鱒類函館移入高　（明治四十四年）

	下々方	三石	浦河	幌泉
鮭	九二一石	五七九石	六二一石	一、〇七八石
鱒	六六一	五一〇	五一三	八三七

函館新聞の伝える商業記事

明治十九年

浦河近況……市中にて商人の重なるものは、田中善三郎、稲葉出店、旅店は山玉印、貸座数は五戸の内大三印を以て首とす。

明治二十一年

二月……昆布相場三石郡五二〇円、塩切鮭相場、一円に付幌八本三分、浦河十本半、三石九本半

八月……新昆布、この程着したる様似、浦河産新昆布（荷主矢本蔵五郎氏）二百石清国商人へ昨日百石につき二九五円にて売放す。

八　日高の鉱床

鉱産物の開発

明治十九年北海道庁が設置されると、開拓使時代の地下資源に対する政策を踏襲して、大規模な地質、鉱山の調査をはじめ鉱床の開発に乗り出した。その中心がライマンの弟子山内徳三郎であったが、さらに明治二十一年には理学士神保小虎を加えて調査を続け二十四年所期の調査が一応完了した。

その結果は「北海道地質調査報文」「北海道地質略論」「北海道鉱床調査報文」「鉱物調査報文」などの報告書としてまとめられ二十三年以後次々に刊行されている。そしてこれらの報告書に基づいて鉱産物が次第に開発されていった。

日高にも明治二十一年から二十三年にかけて北海道庁抜手を派遣し日高の鉱物を調査している。この頃の日高の鉱床については『北海道鉱床調査報文』に明らかにされているのでそれを摘録しておく。

〔石　炭〕

沙流、新冠、静内三郡内及びその他に散在せる炭層の概況、

荷負炭層

沙流川を溯る凡そ八里にして支流「ヌカピラ」に達す。この支流を泝る凡そ二里半右側なる字荷負と称する小溪中に炭層の露出数ケ所あり。然れども炭質貧劣且つ其厚さ僅に一尺乃至一尺五寸に過ぎざれば、掘採に堪巾可きものに非す。其方向は北三十度東にして傾斜は凡そ五十度なり。

タウシナイ炭層

炭層は沙流川上流、現時土人居住最終の村落長知内村の対山溪谷にあり。「ヌカピラ」支流吐口より一里強上流に位す。炭質は佳良ならす、厚さ二尺五寸の一層を有し、方向は北十度西にして傾斜は三十度より四十度なり。該炭山は今を距る十年前仙台の人高橋三内土人を使役し、殆と一ケ年間試掘に従事せしと雖も岸層薄く且つ運搬の便を得ざるを以て、終に廃坑に帰せりと云う。

ホルカハエ炭層

この煤田は波恵川水源に近き處にあり。海浜門別村を距る北六里、海面上高さ凡そ八百尺、東北は厚別山脈に接続し、西北は連山

起伏し夕張岳に至る。南は海に面し、山岳高からず唯二三の小丘あるのみ。炭層は二尺以上の者二層、三尺のもの一層にして、方向は南六十度東に走り傾斜は七十五度なり……（中略）

右の如薄層は現今の景況にては到底掘採の望なしと雖も、他日人口蕃殖、薪材の欠乏を告ぐるに際せば、有用燃料として掘採し得るに至らん。

幕別炭層

ここは染退川の支流マクンベツ溪間にあり、海浜下下方村を距る四里半、開坑は明治三年頃仙台藩支配中に在りて凡そ一ケ年程採炭に従事し後廃業せりと、是全く炭層の薄きにあらずして、下下方村海浜船積の不便と販路なきとに職由せし者ならん。

該煤田は旧開拓使に於て米人ライマン氏の調査せし所にして、其報文に依れば該煤田中掘採に堪ゆへき炭層は二層にして、其厚さ上層は三尺、下層は四尺ありと、然れども現今は是等の炭層泥砂を以て填塞せられ之を見る こと得さりしも、近傍の岩石は砂岩にして、方向は北四十五度西に走り、斜度は四十五度なり。炭層に沿うて開削したる旧坑は所々にありと雖も、今は崩壊して出入することと能はさりし……（略）該地は運搬の便に乏しさが故に、目下の景況にては到底堀採に堪えず。然れども他日海岸に鉄道を布設し、浦河湾又は室蘭港を改築するの運に達せば、該煤田を始めとし前記のハエ煤田その他沙流川筋煤田等は、有用煤田として開採せらるに至るへし。

慶能舞炭層

慶能舞川上流字クイトクに甚だ貧薄なる炭層の一露出あり。

元神部炭層

厚別川の上流、元神部太より下流一丁許りの処に、厚さ四寸の炭層と一尺二寸の褐色頁岩あり、南西に六十三度の傾斜を為せり。

新冠川炭層

新冠川を泝る凡そ九里余字ポキアツに炭層あれども開採に堪えざるものとす。

また同じ川筋字アクマップに露出せる石炭は幕別煤田に連続せるものなれども、開採に堪ゆる可きものに非す。

ヲタツコブンベ炭層

門別川の支流ヲタツコブンベに炭層三層あり、厚さ三尺八寸、一尺五寸及び五寸しして稍々南北に亘り西方へ十度余の傾斜をなせ

り、蓋波恵川の石炭と同層ならん。

外に石炭所在地は、日高三石海岸、浦河郡杵臼村字「フシウス」「ホロマン」の二ケ所。

〔石油〕

新冠川石油地

新冠川の上流海岸を距る事八里許、チシュップとシユネナイとの中間に於て油臭を発する所あり。此地点検の際は雨後河水氾濫詳に其所在を認る能はず。其小量なるを知るへきなり。

セップ沢石油地

高江村を距る西北一里半海浜を距る僅に廿丁許にして、水聲潺湲たる小流字セップ沢の溪底より極く小量の石油を湧出す。岩石は砂岩にして、北三十度西に走り斜度は六十度なり、この景況なれば将来多量の石油を産出し得へくも見えされども、尚他日削井を試み詳査をなすこと必要ならん。

ポロカキネシユマ石油地

セップ沢より海岸に沿ひ西北に向いポンカキネシユマとポロカキネシユマとの中間路傍に含油層露出せり。五十二度の傾斜を以て南八十度西に向へり。

此地は根室街道に当り平常衆人の通行する処なれども、満潮に際しては油層海水に洗われ、或は日光其蒸発を促す等に由り、深く注意せざれはその油層たるを知らすして通過するに至る。ポロカキネシユマの溪間十二丁余の間に石油層五ケ所露出せり。これを下流より数うれば、第一は厚さ僅に二寸、五十度を以て南八十八度西に傾斜し、第二は厚さ二尺と一尺三寸の二層にして四十五度を以て正西に傾き、第三は油気ある粗粒砂岩、十四尺と四尺の油層にして西方へ五十五度の傾斜をなせり、第四は十尺と五尺の二層にして傾斜方詳ならず。第五は四十二度にて北七十五度西に傾斜せり。

ポロテシユケウシペ石油地

ポロカキネシユマの西北四町ポロテシユケウシペの溪間十二丁余の間に露出せる含油層は三ケ処ありて第一は南八十度西へ五十度の傾斜をなし、第二は厚さ七尺と六尺の二層あれどもその傾斜詳ならず。第三は七尺と八尺の含油砂岩及び頁岩とす。

ヲプンカルンペ石油地

ポロテシユケウシペ溪頭の北六丁余、厚別川の支流ヲプンカルンペの上流五丁余、三丁内の地に於て石油三処より滴出せり。一は二十二度の傾斜にて北六十度西へ向へる厚さ一尺五寸の油層より来り、他は沖積層と厚さ二寸余の含油砂岩より滴出せり。この砂岩は四十度にて北六十度西に傾斜せり。

以上セップ沢よりヲプンカルンペの地を包括すれば、東西十五丁南北三十丁の地域を占め、厚別川口に近き大狩部村の東方に於て一油田をなす。これを新冠油田と称す。

（因に新冠油田の油質は葱色）

その含油層占領の地積大約百五十万坪とす。油層はその数多く厚薄一ならすと雖も、概ね南北に亘り五十度を以西方に傾斜するものの如し、此地西南は海岸に接し、西北は厚別川に接すれば運搬など頗る便ならん。

〔砂金〕

本道に産する所の黄金は悉く砂金にして、利別砂金地を以て第一とし、知内、幌別の二地これに亜く、その他日高の元浦川筋……（略）等に至りては、農漁の余暇良部を撰て洗集せば或は多少の利益あるべしと雖も、概ね採集に堪えさるものとす。旧土人シャクシャイン反逆の時に採集せし有名なる染退川の金は、屢々探討を為せしも未だその産地を詳にせす。砂金の本源は、花崗岩中にあり、とは、さきに利別川の上流蟹寒山に於て発見せる所にして、その他は未た此の如き徴証を得ざるも、その産地多くは花崗岩に関係せる位置にあり。

幌別砂金地

幌別川を溯ること二里半、本川岐れて二となる。一を崇満（スマン）と云ひ、一を峻別（シュンベツ）という。この崇満太太二十丁許の間、その対岸峻別の西支流フレツチ辺より下流トプチに至る迄は彼の旧記に著名なる砂金地にして、殊に崇満河畔はその旧趾最も多し。然れども何れの場所も小量にして労利相償うに足るものなし。

元浦川砂金地

元浦川の上流二里廿丁字ヒトツの溪間に、カネカルウシと称する地あり。これ寛文年間まで盛んに金を掘りし地にて、今尚古坑より砂金流出せるのみならず、長三十丁巾二十丁の間多少の砂金を産せさるなし、然れどもその量僅少にして、良部と雖も一立方メートル中〇、〇〇三四匁即金十銭二厘に過ぎず。是より上流三里半ポンアサマセップに於て淘金せしに、一立方メートル中〇、〇〇五

一匁即金十五銭三厘を得たり。夫より一里上流ソロカンベ旧金田に達せり。この地一丁四方計なる小区にして、過半は昔時既に掘尽せり。その残部二ケ所に於て試洗をなせしに一は一立方メートル中〇、〇一四二匁即金四十二銭六厘の砂金を得、一は〇、〇〇五七匁即金十七銭一厘を得たり。此地より少く上流に於て本川岐れて二流となり、東はソエマップと云い、西をニシユヲマナイと云う。ソエマップを泝る事僅にしてシロチミの小流あり、此溪間の試洗は一立方メートル中砂金二、三七二匁価金七円十一銭六厘を得たり。

後鞆（シリエントモ）砂金

浦河近傍後鞆村字白井堤に於て試洗せしに、一立方メートル中砂金〇、二四四匁を得たり。

又同村ポロシユマにても同じく〇、三四八匁を得たり。

ウセナイ砂金

静内郡有良村字ウセナイに於て淘金試験をなせしに、小量の砂金を得たり。この沢に昔時砂金淘汰の遺跡尚存せり。

その他新冠郡の高江村の西半里内にある「オコマサリ」及び「ポンヌツカ」「ポロスツカ」の三溪流中に小量の砂金あり。

〔石灰石〕

本道石灰石産出の地甚だ少からずと雖ども、概ね西部長万部以南の地にあり。東部にありては日高国と、石狩国上川と北見国宗谷郡にあるのみ、而して是等の灰石は皆古生統に属し、角岩、粘板岩、砂岩等と交互累層せり。

又古生統の接合帯に属するものは結晶状を呈せり。又、第三紀層中に層状をなし、或は頁岩中に団塊をなすものありて其質頗る純粋なるものあれども、前者とは全くその年代を異にせり。

元浦川灰石

元浦川の上流七里字「ソロカンベ」砂金地の上流に厚さ三十尺許の灰石あり。

（附）浦河郡元浦川支流「ヘタツトイ」近傍に大理石所在

三石灰石

三石川の上流凡そ六里字「メナシペツ」近傍に緻密にして少く帯色を帯びたる灰石又は薔薇色の大理石現出せり、その厚さ凡六十尺にして、方向は東南に走れり。

（附）三石郡「ヘストカリ」川上、西舎川上、大理石所在、三石郡「ヘストカリ」灰石所在

幌別灰石

幌別川を泝ること二里半余、右方より来る支流「スマン」を経て、なお本流を泝ること凡そ十丁許にして峨々たる白色の岩山空中に屹立せるあり、これさきに三石川に於て点検せしところの大理石と同質にして、岩石の方向及び傾斜の度より推考すれば、この岩層は蓋し三石郡の西北に起り東南に向て走り、幌別近傍に於ては岩層漸く厚く、終に幌泉海浜に貫通せるものならんか、その延長は殆ど七里に連亘し、石質又美麗なれば、将来此有要建築材を採出せばその利益莫大なるべし。

又該石材を削出せんとするに当ては、第一に岩石断裂の有無と、第二に運搬の便とを考究せざるべからず。而して第一点については、尚試削を要すべしと雖も第二点に於ては幌別を以て最も適当なる所とす。何んとなれば該沿川には天草移民の開墾地あり、溪間広くして平地多く、浦河港を距る僅に三里余なれば此間に木道を布設し、馬車にて運搬するは容易なるべし。柳も大理石の用たるや、大塊は琢磨彫刻し洋風家屋装飾の用に供し、その小片は以て茶器文具を製すへく、その他破末の部分は石灰を焼きて土木工事に使用する等、その需用の広き牧挙に遑あらざれば、精密に採削、運搬の良法を研究し事業に着手せは、その利潤も亦鮮小ならざるべし。

灰石は単に焼灰に適するのみならず、深く掘採せは必す美麗なる大理石を得るに至るべし。特に三石のバラ色を帯ぶものの如きは最も美なりとす。

〔建築石〕

全道中殆と有らざるなし、殊に古火山は数百年間風雨に暴露しその面の磨円せざるを見れば最も久に耐える。但その中甚だ堅く作工に易からざるものあり、「カモイコタン」石層の黒色「クウヲルツ、サイト」石は非常に堅いけれども建築用に最良なり。

本道にある建築石は安山岩、凝灰岩、花崗岩の三種とす。

日高山脈を構造する花崗岩及び古生統の砂岩、粘板岩中、建築石材又は石板となすへきものあらん。

〔装飾石材〕

全道中装飾に供すべき石材数多あるへしと雖も、既知せるものは灰石、蛇紋石、梅林石、瑪瑙及び黒曜石とす。

蛇紋石は三石川を溯ること一里字「カモイコタン」に於て両岸に断崖絶壁をなし、大約一里の間露出せり。此地未だかつて採石せし事なし。又同国様似郡平鵜、誓内両村の間に於て露出し、暗緑色を呈し、頗る美観ありと雖ども皆小塊なり。

梅林石は、白点ある輝緑岩又は其凝灰岩にして処々の古生層中にあり、殊に「アッペツ」に多し。

〔黒鉛〕

三石川上流五里、「字カバボイ」河岸に大石英脈現出せり、その方向は東北にして斜度は三十度なり。その中部に厚さ一尺余の黒鉛を包蔵す、その質は純良ならざれども、なお試掘捜索せば佳良の部分に遭遇するやも量る可らず、この鉱物たるや需要甚だ広くして、冶金用坩堝或は鉛筆製造に要する原質なれども、本道中未だ純粋なる黒鉛を産出せるを聞かず、且つこの黒鉛もその質恐くは右等の製造には適せざらん。然れども鋳鉄製の器具に塗抹して腐蝕を防ぎ、且光沢を与うる等の用に供するに足るべし。

〔辰砂〕

静内郡「ウセナイ」に所在す。

思うに本道の鉱産物は、従来主として石炭が中心となっているようであるが、明治二十四年に後志国然別鉱山が開坑されると、金銀もそれに加えられるようになった。

この鉱山は年と共に段賑を極めやがて製錬所が設けられるようになると轟鉱山と改称し、わが国屈指の鉱山に列した。先きに述べた元浦川上流の「カネカルウシ」の地の砂金も、明治二十四年以来出願者があって借区の許可を得て採掘をはじめたが、上流沿岸一帯は砂金の産出はあったがその量は多くはなかったという。

補遺（明治三十年前後の日高鉱業の現況状況報文に依る。）

•明治二十四年以来、試掘若しくは採取を出願して許可を得たる鉱場は実に九十余筆の多きに達すと、雖も、多くは投機者流が奇利を得んがため出願したるものにて、実際その業を営むもの稀なり。鉱物の種類は石炭、砂金、石油を主とし、石灰石は未だ出願者なし。

•砂金…日高の河川は大低多少なりとも産すれどもその豊富なる部分は昔時採取して殆んど尽きたるものの如し。

現在借区は染退、新冠、元浦川、幌別等諸川の上流及び海岸小流の沿岸にして、人員九名筆数二十余とす。

その内実際採取に従事するは僅に半数にして、染退川上流には夏期凡二十名、新冠、元浦川、幌別の上流には各々数名の採取夫入稼きするに過ぎず。概ね一人につき一ケ月砂金五・六分の入場料を借区人に納めて随意に採取するなり。

•様似村東金山の再現を目指す開発計画をたてたのは明治三十八年のことであった。而し産金の低下は遂に閉鎖の運命を辿るに至る。

•水銀…明治三十年代に新様似に水銀鉱山が発見され、その鉱区は七二九、〇六四坪に及んだが、その経営は四十年頃で、以来その運

営によって隆替を見せながら、結局成果を挙げることができずやむなく発掘を中止した。

九　交通運輸の事業計画

1　日高路の面目

明治五年の浦河支庁の設置、明治十九年の北海道庁及び郡役所設置によって産業の拡充と共に交通、運輸面の事業計画は次第に緒についていった。

明治十九年様似―幌泉の両山道は嶮岨でつづらおりの坂道が多く、ことに冬期は積雪のため交通は杜絶し、行旅の人は嶮を冒して海岸を通行し、山道は自ら荒廃し激浪の際は数日間往来杜絶して不便が少なくないので、この年様似海岸（冬島―幌満間）に突出する岩石を削除した。明治二十四年、さらに工事を施し同区間の開さくが行われ漸く駄馬を通ずるにいたった。また猿留海岸の難所を開削し隧道を設けた。二十六年には苫小枚から佐瑠太に至る十里余を開削し同二十八年、佐瑠太―高江間の中三里を開さくし川に橋梁（佐瑠太橋）を架けた。日高各村にも人家がふえていったが、地形的に山を背負い海に面して町並みは海岸線に沿う国道をはさんでその両側に伸びていったし、河川の挟い流域に人家が散在して部落を形造っていった。

当時は徒歩か駄馬の背によることが多かった。乗馬に経験のないものが、人を見る馬に暴れられながらもしがみついて辛うじて旅を続けたナンセンスもある。この頃の日高路に馬の背に揺られる行旅の人々の数もふえて来て、のんびりした風景も見られるようになった。明治三十年、駅逓馬車がはじまって、一二頭曳の幌馬車や駅馬車がラッパをプープー吹きながら、所々で客を拾いながら駈けたものだが。駅逓の歴史はその設置年月は明らかでないが、各運上屋において通行の官吏等を取扱ったのに始まり、公文書は早馬、早走を以って順次逓送せしめたものである。駅逓は日高のように道路の不便な未開の地域には大切な機関であり、昭和のはじめにおいてもなお十カ所も存在していた。

さて馬車は一日の里程が十里程度で浦河から静内（下々方））までが関の山、翌日は富川（佐瑠太）までという具合でいく日かの宿泊によって、漸く苦小牧に至るという不便なものであった。北海道殖民状況報文は三十年当時の陸路の状況を次のように記録している。

『国道ハ海岸ヲ通シ胆振国ヨリ十勝国境ニ至ル四十里余トス、甚過半ハ粗鬆ナル海岸砂地ニ属シ東部ニハ間々岩石ノ地アリ、概